

アルベール・カミュ『異邦人』における口承性 —古代レトリックとプラトンの対話—

阿部いそみ

本研究の目的は、アルベール・カミュの『異邦人』を口承性という視点のもとで解釈し、その意味を探ることにある。考察にあたり、「話されることば」そしてその対立概念である「書かれたことば」について、「音の世界（聴覚の世界）」及び「文字の世界（視覚の世界）」としてとらえることから始めた。分析をとおして、文字の世界は主人公を死に導くものとして描かれているが、音の世界は幸福につながる様相を呈していることを見出した。また古代における話す方法、すなわちレトリケー（古代弁論術）やディアレクティケー（プラトンの対話篇）とこの小説との類似点も明らかにした。ウォルター・J・オングが述べたように、「書かれたことば」とは死に結びつき終わりという段階を持つ。『異邦人』における文字の世界の優位性は、プラトンの対話篇と同様に、この作品が読者に開かれ読者と共に生き続ける終わりを持たないテキストであることを示している。

はじめに

アルベール・カミュは1936年、アルジェ大学哲学科に「キリスト教形而上学と新プラトン主義」と題する学士論文を提出している。このような背景もあり、アルベール・カミュと古代ギリシア哲学とのつながりについて語るとき、新プラトン主義の哲学者プロティノスの名前があげられることが多いが、プラトン（すなわち新プラトン主義が依拠する哲学者）について言及されることは少ない。たしかに『手帖』に記された文章や書簡にもプラトンについての記述が見出されるものの、作品への直接的影響はあまり認められないように思われる。

しかしブリス・パランの『プラトン派のロゴスに関する試論』（1941）や『言語の本性と機能についての探究』（1943）をめぐる評論「表現に関する一哲学について」（1944）を発表したアルベール・カミュは、ブリス・パランが言語の問題を形而上学的問題ととらえている点に注目して分析を進め、言語の不確実性を超越するための方法としてプラトンの対話をとりあげている。

[...] ギリシア思想がそのもっとも純粋な文学的形式を対話に見出したのは、無意味なことではないのである。ソクラテスの努力、プラトンの努力は我々の行為と我々の表現とを超越する法を見出すことであった。¹

プラトンの著作は、論文形式ではなく対話でつくられている。対話とは、ギリシア語ディアレクティケーである。ディアレクティケーは弁証法と訳され、ヘーゲルの弁証法として受け取られることが多いが、元来は問答法や対話術の意味を持つ。その後、西洋哲学の歴史のなかで各国語に取り入れられさまざまな意味を与えられていった。ディアレクティケーを最初に哲学的探究の方法とし体系化したのはプラトンである。ディアレクティケーに類似し、かつ対立する概念にレートリケーがある。レートリケーとは、古代レトリックつまり古代弁論術を意味している。プラトンは、「長い言論（弁論）によって人々を説得する方法であったレートリケーに対して、できるだけ短いことばからなる問答（対話）によって、ものごとの〈何であるか〉の知識を探究する方法」²としてディアレクティケーを提唱した。ディアレクティケーとレートリケーにはこのような違いはあるが、いずれも何らかの相手を前にして話す方法である。

このように対話とは話される言語に属するが、従来から『異邦人』には話しことば的な要素が含有されていると指摘されてきた。本稿の目的は、『異邦人』をプラトンの対話という視点、「話されることば」という視点から解釈し、その意味を探究することにある。以下では、「話されることば」及びその対立概念「書かれたことば」を、「音の世界（聴覚の世界）」と「文字の世界（視覚の世界）」としてとらえることをとおして『異邦人』を分析することからはじめた。次にレートリケーと『異邦人』との関連を明らかにし、最後にこれらをふまえ、ディアレクティケーの視点によって考察を行った。

I 『異邦人』における文字と音

1 否定される文字の世界

1) 批判の対象としての電報

この小説は主人公ムルソーの「わからない」という感想から開始される。

きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、私にはわからない。養老院から電報がきた。「ハハウエノシライタム マイソウアス チョウイ ラビョウス」これでは何もわからない。(I, p. 141)

「わからない」という感想は、電報文への批判である。ウリ・アイゼンツヴァイク³が指摘するように、『異邦人』においてエクリチュールは否定されており、小説冒頭で批判される電報はそれを象徴している。またその電報が伝える内容は、母の死という不幸を伝えるものである。このように小説冒頭から否定され、かつ、死にも密接に結びついている文字の世界は、以下に示すように、小説中の他の場面においても何らかの罪悪や不幸に関連し、最終的には主人公を死へと導く契機となっていることがわかる。まず新聞について述べ、次に手紙について考察する。

2) 新聞に付与された不幸

第一部第2章に、アパートマン内でのムルソーの様子が描かれる場面がある。

昼食のあと、少し退屈してアパートマンのなかをぶらぶらした。ママンがここにいたときは便利だった。今では私にはひろ過ぎるので、食堂の机を私の部屋へ運び込まなければならなかった。私はもうこの部屋でしか生活しない。すこしくぼんだ藁椅子と鏡の黄色になった衣裳箆筒と、化粧机と真鍮の寝台との間に。そのほかはどうでもよかった。しばらくたって何かしなければならぬから、私は古新聞を手にとって読んだ。クリュシエンの塩の広告を切り抜き古い帳面にはりつけた。新聞のなかで面白いと思った事がらをそこに集めておくのだ。手を洗った。最後に露台に出た。(I, p. 152)

この場面は、第二部で独房の身となる状況の伏線として読むことができる。というのも第二部第2章に描かれるムルソーは、刑務所内で退屈を克服しようと模索するのである。また独房という空間もまた、伏線的要素として認められる。第一部第2章には、「私はもうこの部屋でしか生活しない」という表現がある。これは、一つの部屋としての独房空間を暗示する。さらに第二部第2章の次のくだりは、第一部第2章の場面に多くの類似要素を持っている。

藁布団とベッドの板との間に、実は一枚の古新聞を見つけたのだ。すっかり布にはりつき黄ばんで裏がすけていた。その紙は、頭の方こそ欠けていたが、チェコスロバキアに起こったらしいある事件の記事を載せていた。(I, p. 187)

まず指摘できる類似点は、藁という要素である。藁椅子と藁布団という違いはあるが、いずれも藁素材である。そして次に、古新聞を読むという共通点である。さらに、年月を経て黄色になったものが描かれているという共通要素もある。第一部では鏡の黄色になった衣裳箆筒であり、第二部では黄ばんで裏がすけている古新聞である。このように、第一部第2章の古新聞の広告を読む箇所には、第二部で囚人となるムルソーが伏線として描かれている。

また、『異邦人』における新聞は不幸な事件と深いつながりを持つ。例えば次の箇所を見てみよう。第二部第3章で法廷が開始される直前の場面である。法廷内に多数の人々が集まっている状況を前にして、ムルソーは憲兵とことばを交わす。

「何という大勢の人だろう！」と憲兵にいうと、これは新聞のせいだと答え、陪審員席の下のテーブルのそばに陣取った一団を示した。「あそこにいるよ」と彼はいった。「誰がです？」と尋ねると「新聞さ」と繰り返した。(I, p. 189)

憲兵はムルソーからの二つの質問いずれに対しても、「新聞」という省略した表現で答えている。省略せずに答えるならば、ムルソーの最初の質問には、例えば「新聞記者がたくさんいるためだ」となる。しかし憲兵は人物を示すことば「新聞記者」ではなく、「新聞」という事物を示す表現をしている。そして続く質問についても同様である。この質問には「新聞記者」と人物を示す表現で答えるべきところである。し

かしここでもまた「新聞さ」と答えている。

さらに、続く場面では、ある新聞記者が次のように話す。

「御承知のように、あなたの事件を少々持ち上げました。夏は新聞にとっては種切れの季節でね。それで何かバリューのあるものといったら、あなたの事件か親殺しの事件しかなかったんで」と彼は付け加えた。(I, p. 196)

ここで新聞記者が発している「新聞」ということばは、憲兵が繰り返したことば「新聞」を直接受け継ぐ形で読者の耳に響く。新聞記者がここで述べているのは、新聞にとって価値のあるものは、ムルソーの事件或いは親殺しの事件であるということである。つまりこれらの場面には、「新聞＝殺人事件」という図式が形成されている。

新聞への言及は第二部最終章にもある。最終章の前半部には、死刑制度をめぐる熟考するムルソーが描かれている。

私はかねて死刑執行の話に十分注意を払わなかったことが、悔やまれた。ひとはいつもこの問題に関心を持たねばならないだろう […] みんなと同じように、私も新聞の記事としては読んだことがある。[…] 新聞は、しばしば、社会に対する責務ということ語っていた。新聞によれば、それは償わねばならないのだ。(I, p. 204)

新聞は本来さまざまな話題を取り扱うものだが、ここでは新聞が死刑制度と直接のつながりを持つものとなっている。新聞と死刑とのつながりは、第二部最終章でのギロチンをめぐる熟考の箇所で鮮明化する。

長いこと私は、なぜかわからないが、ギロチンにかけられるには、階段をのぼって、断頭台にあがらねばならぬ、と信じていた […] しかしある朝、ある噂高い処刑の際に新聞に載った一枚の写真を思い出した。(I, p. 206)

新聞は上記のギロチンをめぐるくだりにおいては、処刑という生々しい死に直接結びついて提示されている。

このように小説中に描かれる新聞は、罪悪を付与され不幸と密接なつながりを持っているのである。

3) 手紙に付与された不幸

ムルソーが死刑執行判決を受ける身となったのは、アラブ人を殺害したためである。しかしそのアラブ人とムルソーとの関係はといえば、友人レエモンの恋敵であったにすぎず、ムルソーが殺害対象のアラブ人に強い憎悪を持っていたわけではなかった。またレエモンはアパートマンの一隣人であり、二人が親しくなるのは、ムルソーがレエモンから手紙の代筆を依頼されたことがきっかけである。それは、法廷での検事のことばに端的に示されている。

続いてレエモンの番が来た。彼が最後の証人だった […] すると検事は、ドラマ

の発端をなす例の手紙が私の手で書かれた、そのいきさつを尋ねた。(I, p. 196)

殺人事件の発端は手紙にあった。レエモンに依頼され手紙を書いたからこそ、ムルソーは殺人を犯し最終的に死刑判決を受けた。つまり、ムルソーを死に導いたのは手紙である。

以上で見たように、小説冒頭の電報にはじまり、新聞、手紙はいずれも、何らかの不幸や罪悪に関連している。さて、このような文字の世界・視覚情報の世界が、不幸に結びついて描かれていることとまさに対照的に、音の世界・聴覚情報の世界は、幸福につながる様相を呈している。次章でその詳細を述べていきたい。

2 幸福感につながる音の世界

『異邦人』結末部に次の一節がある。

このとき、夜のはずれでサイレンが鳴った。それは、今や私とは永遠に無関係になった一つの世界への出発を告げていた。ほんとうに久し振りで、私はママンのことを思った。一つの生涯のおわりに、なぜママンが「許婚」を持ったのか、また生涯をやり直す振りをしたのか、それが今わかるような気がした。[...] 世界を自分と非常に似た、いわば兄弟のようなものと悟ると、僕は、自分が幸福であったし、今でもそうだと感じた。[...] (I, pp. 212–213)

ムルソーはサイレンの音を耳にし、それを契機に「わかる」という気持ちを得、さらに「幸福であったし、今でもそうだ」ということを自覚する。

先に言及したように、小説冒頭は主人公の感想「わからない」で開始されていた。しかし結末部においては、主人公は「わかる」段階に至る。このようにこの小説は、主人公の「わからない」で開始され、最後は「わかる」段階に至る。またムルソーの「わからない」という感想をもたらした契機とは、電報という文字による情報である。他方、小説最後に「わかる」という段階を得る契機となったのは、サイレンつまり音による情報である。ムルソーは、文字に対しては否定的（「わからない」という感想）であるが、音に対しては肯定的な反応（「わかる」段階の獲得）を示している。さらに、電報が伝える内容は「死」であったが、サイレンの音を契機に自覚されたのは「幸福感」である。

このような「幸福感」など肯定的な意識につながる音の描写は、結末部以外にも見出すことができる。それは例えば第二部第4章の次の場面である。

[...] 弁護士がしゃべり続けているさいちゅうに、街の方から、この法廷のひろがりを経て、アイスクリーム売りのラッパの音が、私の耳もとまで届いてきたのだ。もはや私のものではない一つの生活、しかし、そのなかに私がいとも貧しく、けち臭い喜びを見出していた一つの生活の思い出に私は襲われた。夏のおい、私の愛していた街、夕暮れの空、マリイの笑い声、その服。(I, p. 202)

法廷内にいるムルソーは、アイスクリーム売りのラッパの音を聞き、囚人となる以前の幸福な生活を思い出す。ラッパの音という聴覚情報が、夏のにおい、夕暮れの空、マリイの笑い声など、自由で幸せであった生活を思い出すきっかけとなっている。このように、小説中で音は幸福感に結びつくものとして描かれている。

同じようなくだりは、第二部第3章にも見出される。裁判所から刑務所に戻る護送車の中で、ムルソーは街の物音を耳にする。そこでは、牢獄の身となる以前の幸せな日々を思い出させる音が列挙されている。

護送車の薄闇のなかで、私の愛する一つの街の、また、時折り私が楽しんだひとときの、ありとある親しい物音を、まるで自分の疲労の底からわき出してくるように、一つ一つ味わった。すでにやわらいだ大気のなかの、新聞売りの叫び。辻公園のなかの最後の鳥たち。サンドイッチ売りの叫び声。街の高みの曲がり角での、電車のきしみ。港の上に夜がおきる前の、あの空のざわめき。—こうしたすべてが、私のために、盲人の道案内のようなものをつくりなしていた。—それは刑務所に入る以前、私のよく知っていたものだった。そうだ、ずっと久しい以前、私が楽しく思ったのは、このひとときだった。(I, p. 97)

このくだりには「盲人の道案内のようなもの」という表現があり、視覚情報が排除された状況への明確な言及を認めることができる。視覚情報が完全に排除された聴覚情報の世界、文字ではなく音による世界が、幸福感とつながりを持ち価値を与えられている。

以上において、『異邦人』における文字の世界と音の世界をめぐる考察を行った。分析をとおして、「否定され、不幸に結びつく文字の世界」、及びそれに相対するものとしての「幸福感につながる音の世界」という図式を得ることができた。次章では、これが何を意味するのかについて考察していきたい。

II レートリケーとデアレクティケー

1 書かれたことばと死

ウォルター・J・オングは、プラトンに言及しながら、書かれたことばと話されることばをめぐる次のように指摘する。

[...] 声の文化の闘技的な心性をまだ保っているプラトンのソクラテスは、つぎのようなことも、書くことへの反論と考えている [...] 現実の（話される）ことばと思考は、本質的には、つねに現実の人間どうしのやりとりのコンテクストのなかに存在するが、書かれたものは、そうしたコンテクストから離れ、非現実的、非自然的な世界のなかで受け身にとどまっている [...] ⁴

話されることばは人々の会話の中に生きて存在するが、書かれたことばは終結した状態におかれている。ウォルター・J・オングは次の見解も明らかにしている。

書くことに内在する驚くべき逆説の一つは、それが死と密接なつながりをもつことである。書かれたものは、非人間的で、事物に似ていて、記憶を破壊するというプラトンの非難のうちに、このつながりはそれとなく示されている。⁵

書かれたことばは死に結びつく。しかし話されることばは、他者とのやりとりの中に生きて存在する。前章で見たように、『異邦人』における文字の世界は不幸につながり、主人公を死に導くものとして描かれている。プラトンは、対話という形式、すなわち「話されることば」によってその思想を展開した。『異邦人』における音と文字をめぐる様相を考察する際には、プラトンの対話篇が重要な手がかりを与えるのではないだろうか。

対話つまりディアレクティケーと対立する概念として、レートリケーがある。以下では、話す方法という点で共通するディアレクティケー及びレートリケーをめぐる、『異邦人』との関連を述べていく。まずレートリケーと『異邦人』との関連について扱い、次にディアレクティケーについて考察する。

2 レートリケーとディアレクティケー

1) 古代レトリックと3種類の弁論

一般にレトリックには修辞学という日本語訳が与えられるが、元来はことばによって説得する技法、つまり弁論術を指すことばであった。弁論術は、紀元前5世紀半ば、現在のシチリア島の都市シラクサに生まれた。当時シラクサでは人民の大集会で政治の大討論会がしばしば開かれ、多くの人々の前で話す技術を持っていることが重要であった。そしてレトリックはその誕生からおおよそ1世紀を経て、アリストテレスの『弁論術』によってはじめて学問としての体系化が行われた。アリストテレスは、これまでの弁論家が法廷弁論を主に対象としてきたことを非難し、法廷弁論を含みつつも2つの弁論を加えて3つの種類、「法廷弁論」、「審議弁論」（議会弁論）、「演示弁論」（慶弔弁論）に分類した。「法廷弁論」とは裁判官を前に弾劾や弁護を行うことを目的とし、「審議弁論」（議会弁論）とは、民会のような政治的な会議の構成員に助言を与え賛同させることが目的である。そして「演示弁論」（慶弔弁論）とは、多くの聴衆を前に称讃する（英雄の称讃や死者の追悼）ことを目的としている。アリストテレスの『弁論術』は、現代に至るまで弁論術について言及するすべての概論書の材料でありこの3種類の区別についても後代のレトリック理論に定着⁶していった。

2) 古代レトリックと『異邦人』

弁論術はアリストテレスが体系化した際、議会での審議弁論と慶弔の場面での演示弁論が加わった。これはよりよく話すことがもとめられる場面として、法廷、議会、慶弔という三種類があることを示している。

『異邦人』は次に述べる点において、古代弁論術に関連する要素を持っている。

① 話すことに苦心する場面：弔いの場面、及び法廷の場面

主人公ムルソーは、口にすべきではなかった、といった自己の発言への反省の態度を繰り返す。これは、よりよく話そうとする態度のあらわれである。例えばムルソーは、母の死の報を受けて、会社の主人に休暇を願い出たときに次のように考える。

「私のせいではないんです」といってやったが、彼は返事をしなかった。そこで、こんなことは口にすべきではなかったと思った。とにかく言いわけなどしないでよかった。(I, p. 141)

ムルソーは、母の死をめぐる場面において自分の適切でない発言を反省している。このくだりの直後には次の場面がある。

いつもの通り、レストランで、セレストのところで食事をした。みんな私に対してひどく気の毒そうにしていた。「母親ってものはかけがえがない」とセレストは私にいった。(I, p. 141)

「母親ってものは、かけがえがない」というセレストのことばは、ムルソーが不適切であると自覚した発言の直後におかれ、弔いをめぐる適切なことばの例として提示されているのではないだろうか。また、ムルソーは門衛の前でも自己の発言を後悔している。それは以下に示すように、母の棺を前にした場面である。

彼は棺に近づいたが、私は彼をひきとめた。「御覧にならないですか」というから、「ええ」と私は答えた。彼はやめた。こういうべきではなかったと感じて、私はばつが悪かった。(I, p. 143)

さらに、会社の主人に母親の年齢を質問され、次のように答える。

私が疲れ過ぎてはいないかと彼は尋ね、また、ママンの年をきいた。私は誤りを犯さぬように「六十くらいで」といった。(I, p. 154)

ここには、正しく話そうと努力するムルソーが描かれている。このようにムルソーは、母の死をめぐる場面において自己の発言を後悔し、うまく話そうとする。つまりムルソーは、弔いの場面においてよりよく話そうとしている。

『異邦人』第一部では母の死をめぐる物語が展開するが、第二部では裁判がテーマであり、ムルソーは法廷を舞台とし話す（弁明する）立場になる。つまり話すことへの努力は、第一部においては母の死に関連する場面で展開し、第二部では法廷を舞台にして行われるのである。つまり、ムルソーに話すことが要請されている場面は、第一部では弔いの場面であり、第二部では法廷の場面である。これら弔い、及び法廷とは、古代において弁論上の技術がもとめられた場、すなわち古代弁論術の主要3種類を構成する場であり、よりよく話すことがもとめられる場である。

② 最終部での感情表出

第二部最終章には、ムルソーが怒りを爆発させるくだりがあるが、古代弁論術において、弁論の最終部では感情を表出することが要求された。例えばロラン・バルトも『旧修辞学』の中で次のような説明を与えている。

弁論が終わるかどうかが、どのようにして知るか。それは、発端と同じく、まっ

たく恣意的なものである。したがって、終わりのしるし、結尾のしるしが必要な
のである […] ローマでは、結論は、大演技の、弁護士の身振りの見せ場だった。⁷

③ 大勢の見物人が集まる広場：断頭台、及び演説台

死刑執行の朝を迎えたムルソーは、大勢の見物人に憎悪の叫びとともに迎えられる
という望みをいだく。

大勢の人々を前にし処刑されるということは、多数の人々を前に断頭台に上ると
いうイメージに結びつく。そしてそれは、古代弁論術における多くの聴衆を前に演説
台に上がるという状況を想起させる。例えば古代ローマにおける広場での弁論は、次
のように行われた。

カピトリウムの丘のふもとの広大な広場に人民が集まり、法律に賛成するか廃止
するかを議論した。発言するのは政務官や護民官だけではなく、教育のないただ
の市民が多かった。ざわざわした群衆を前に、弁士は声をはりあげ、大げさな身
振りで議論をもちあげるのであって、こまやかなことば遣いや推論は一切さげね
ばならなかった。下卑たことば遣い、どぎつい悪罵がこういう演説の強烈な特徴
である。⁸

広大な広場に集まった群衆を前にして、弁士は大げさな身振りや激烈な悪罵を特徴
とする弁論を行った。『異邦人』結末の場面、そして広場での弁論のいずれにも共通
する要素として、広場に集まる群衆、そこで発せられる激烈な叫び（『異邦人』では
群衆側による憎悪の叫び、古代の弁論では弁士側による激烈な罵りの声）がある。

以上のように、『異邦人』は主人公がよりよく話すことがもめられる場面（弔い
及び法廷）、最終部での感情表出、そして多くの人々が集まる広場という要素におい
て古代レトリックとの関連を指摘することができる。弁論術とはよりよく話す方法で
ある。『異邦人』における古代弁論術的な要素とは、話しことばというものに価値を
置く作品であることを示しているのではないだろうか。次章では、この探究を進めて
いくために、レトリケーと同様に話す方法という点で共通するディアレクティケー
と『異邦人』との関連について考察した。

3 プラトンの対話篇と『異邦人』

1) 姿を隠している話者

モーリス・ブランショは次のように指摘する。

この〈異邦人〉は、まるで他人が彼を眺め、彼のことを話すときのように、自分
自身に対しての。⁹

『異邦人』の語り手は、他人が自分のことを話すように語る。その結果、自分がはっ
きりと現れていない。ところでこれは、プラトンの対話篇に類似する特徴でもある。
というのもプラトンの著作は膨大な数にのぼるが、それらはすべて論文の形式ではな
く、プラトン以外の人物による対話によって語られる。著者の不在がプラトンの対話
篇の大きな特徴である。議論を進めるのはたいていの場合ソクラテスであり、プラト

ンの代弁者である。

プラトンの「対話篇」の中で、われわれは、いわば言論の無重力空間に立たされたような、ある奇妙な体験をすることになる。しかも、それはプラトンの理解のために不可欠な体験であるように思われる。彼の「対話篇」は単に対話体による哲学的著作という点で特異であるにとどまらず、彼以外の誰にも二度と試みられることのなかった多くの特質をはらんでいる。「著者の不在」もその一つで、奇妙な無重力感は、それによるところが大きい。¹⁰

プラトンの対話篇にプラトン自身は登場しない。ソクラテスの刑死に際し、多くの弟子がソクラテスのもとに駆けつける場面があるが、一番弟子のプラトンはそこには描かれていない。以下に引用するのは、ソクラテスの刑死に駆けつけた弟子の名前が列挙されるくだりである。

エケクラテス：いったい、その場に居た人々というのは、パイドン、誰と誰だったのでしょうか。

パイドン：このアポドロスのほかに、アテナイの土地のものとしては、クリトプロスとその父（クリトン）、さらにはヘルモゲネスと、エピゲネスと、アイスキネスと、アンティステネスがいました。それからバイアニア区のクテシッポスとメネクセノス、ほかにもアテナイの者がまだ何人かいました。プラトンはたしか、病中だったと思います。¹¹

プラトンは病中であったため、ソクラテスの刑死の場に不在だった。この病中という語句には、訳者による次の注釈がある。

この語句は、そのまま歴史的な事実を示しており、プラトンは、実際にソクラテスの死に立合わなかったのか、あるいはこれは虚構か。ともあれプラトンが、彼の対話篇のなかで自分の名に言及したのは、この箇所のほかには、『ソクラテスの弁明』中で、その裁判に立合っていることを明らかに示すのが、二箇所（34A, 38B）あるのみである。¹²

プラトンの対話篇では、プラトンが実際に登場しないことに加え、自分自身への言及もわずかである。プラトンは自らの思想を、自分以外の登場人物の対話によって展開させた。『異邦人』の語り手は、他人が自分のことを話すように語り、語り手自身が隠れている。そしてプラトンの対話篇では、著者は姿を現さず隠れている。

次にプラトンの対話篇と『異邦人』との類縁関係について、「問いに答えるのみ」という点から述べていく。

2) 問いに答えるのみであるということ

『手帖』第4ノートに記されているように、ムルソーは「問いに答えることだけに甘んじている」（I, p. 950）。そしてここにもプラトンの対話篇への類縁関係を指摘することができる。プラトンの対話篇において、議論の担い手は対話の相手に問いを投

げかけ、対話相手がそれへの問い返しを行う。例えばプラトンの想起説が展開される書『メノン』には、幾何学を全く学習したことがない子どもが、ソクラテスとの対話によって正方形の作図問題を解くくだりがある。この子どもが幾何学の答えを得るために行ったこととは、問いに答えることのみである。

[...] これまでまったく幾何学を学んだことのない少年が、この場でも何一つ「教え込まれる」ことなく、ただ問いかけに応ずるだけで、ともかくも正しい答えに行き着いた [...] 最終的には、少年が自力で正しい答えに到達したのだ。¹³

少年は教え込まれることではなく、問いに答えることを繰り返していくことによって、自ら答えに到達する。ムルソーの「問いに答えるのみである」という点は、プラトンの対話篇に登場する子どもが知を獲得していく過程の状況に類似する。

このように、語り手或いは著者の姿が曖昧となっているということ、及び、問いに答えるのみであるという点において、『異邦人』はプラトンの対話篇と類似する要素を有している。次にこの類似が持つ意味を考察していく。

Ⅲ 終結せず生き続ける小説

プラトンは、なぜ対話という方法で自らの思想を表明したのか。著者自身が直接議論を展開していないということから、プラトンが客観的な真理を否定していたとする見方も可能であるが、むしろ次のようにとらえることができる。

[...] ソクラテスの対話的活動が対話相手の（主観的・相対的な）思いなしを客観的な吟味の場に引き出すことを意図していたように、「対話篇」とは知と真理を客観的なものとして成立させるためのスタイルであったと考えるべきであろう。それゆえにこそ、著者は意識的に「第三者」の位置に退き、いわば対象化された自己としての登場人物たちによる対話の進展に向き合っているのである。¹⁴

プラトンが第三者の位置に身を置いたのは、知と真理を客観的なものとして成立させるためである。この「客観的」という表現は、従来から『異邦人』をめぐる分析の際に用いられていることばでもある。例えば、モーリス・ブランショは次のように述べている。

これ [[『異邦人』] は、主観という概念を消失させた本である。そこで示されているいっさいのものは、客観的なかたちでとらえられている。¹⁵

またアルベール・カミュ自身、『異邦人』について「客観性」という表現を含むことば「客観性と自己超越の練習」¹⁶によって説明したことがある。ここで留意したいのは、「練習」という表現である。「練習」ということばは、完成をめざしていく過程という面を持つが、プラトンの対話篇も同様、「過程」という要素を有しているからである。対話とは、話されることばであって、書かれて固定したことばではない。ウォ

ルター・J・オングが述べたように、書かれたことばとは死に結びつき、終わりという段階を持つ。プラトンの対話篇は、対話のスタイルをとっているゆえ、終わりを持たず生き続ける。そして『異邦人』は、客観性と自己超越の練習過程として、終結せずに生き続ける作品である。

結び

『異邦人』における音の世界と文字の世界を比較すると、音の世界は幸福の象徴として提示されているが、文字の世界はムルソーを死へ導き不幸に密接に結びつけている。また、作品を子細に分析すると、古代における話す方法としての2つ、すなわちレートリケー（古代弁論術）やディアレクティケー（プラトンの対話篇）との関連も見出すことができた。これらは『異邦人』において、文字の世界（視覚の世界）よりも音の世界（聴覚の世界）に高い価値が置かれていることを示すものである。そして、この話されることばの優位性とは、プラトンの対話篇において対話という方法がめざしていることに共通する。

プラトンにとって書かれたことばとしての書物とは、否定される対象であり副次的な意義しかもちえない一方で、同じ対象について探究しようとする人々にとっての共通な下書きとしても位置づけられている。対話篇における議論は、話されることばでつくられているという点では生成の過程（生きている状態）であるが、書かれたことば、つまり書物となっているという点では定着化（終わりの状態）している。しかし、それは読み手がそれにコミットする余地を与える下書き的なものである。プラトンにおいて、その思想内容の最終的な決定権は読者にゆだねられる。『異邦人』における話されることばの優位性は、プラトンの対話篇と同様にこの小説が読者に開かれているということを示すものである。生成の過程を描いたプラトンの対話篇と同様に、『異邦人』とは終わりを持たないテキストである。小説の最後に描かれているのは、死を迎えたムルソーではなく、死刑執行の朝のいまだ生きているムルソーである。死という完全な終わりは描かれていない。

注

1. Albert Camus, *Œuvres complètes I 1931-1944*, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 2006, p. 904. 以下 I と略記し本文中に頁数と共に示す。
2. 浅野檣英『論証のレトリック』, 講談社, 1996, p. 155. 尚, 本稿では古代における「レトリック」と「ディアレクティック」の意味であることを明示化するために, 「レートリケー」, 「ディアレクティケー」というギリシア語の表現を用いた。
3. «C'est dès l'abord du texte que se manifeste la négativité de l'écriture[...]» (Uri Eisenzweig, *Les jeux de l'écriture dans L'Étranger de Camus*, Minard, 1983, p. 11).
4. Walter -J. Ong, *Orality and Literacy*, Routledge, 1982, pp. 78-79. 訳出に際し次の邦訳も参考とした: 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』, 藤原書店, 1991。

5. *Ibid.*, p. 80.
6. «A partir d'Aristote, la rhétorique se trouve fixée[...]» : Olivier Reboul, *La Rhétorique*, coll. «Que sais-je?», No. 2133, Presses Universitaires de France, 1990, p. 18. 古代弁論術の歴史について次の邦訳も参考とした：オリヴィエ・ルブール，佐野泰雄訳『レトリック』，白水社，2000。
7. Roland Barthes, «L'ancienne rhétorique. Aide-mémoire» in *L'Aventure sémiologique*, Seuil, 1985, pp. 151-152. 訳出に際し次の邦訳も参考とした：ロラン・バルト，沢崎浩平訳『旧修辞学』，みすず書房，1979。
8. Jules Senger, *L'Art oratoire*, coll. «Que sais-je?», No. 544, Presses Universitaires de France, 1967, p. 18. 訳出に際し 次の邦訳も参考とした：ジュール・サンジェ，及川馥・一之瀬正興『弁論術とレトリック』，白水社，1986。
9. Maurice Blanchot, «Le roman de *L'Étranger*» in *Faux pas*, Gallimard, 1943, p. 249. 次の邦訳も参考とした：モーリス・ブランショ，清水徹・栗津則雄訳『カミュ論』，筑摩書房，1978。
10. 内山勝利『対話という思想』，岩波書店，p. 21。
11. プラトン，松永雄二訳『パイドン』，田中美知太郎・藤沢令夫編『プラトン全集』第1巻，岩波書店，1975，p. 160。
12. *Ibid.*, p. 161.
13. 内山勝利「プラトンの対話について－若干の補遺と再確認」，片柳榮一編『ディアロゴス』，晃洋書房，2007，p. 11。
14. 内山勝利編『哲学の歴史』第1巻，中央公論新社，p. 446。
15. Maurice Blanchot, *op. cit.*, p. 248.
16. «[...]un exercice d'objectivité et de détachement[...]» (Albert Camus, *Œuvres complètes III 1949-1956*, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 2008, p. 416).